イタリア紀行

1993年11月　右城　猛

イタリア紀行目次

１．まえがき …… １
２．イタリアのプロフィール …… １
３．イタリアへの旅立ち(10月13日) …… １
４．ローマ市街の印象 …… ２
５．ローマのホテル …… ２
６．ティヴォリ見学(10月14日) …… ３
（１）ローマ郊外 …… ３
（２）ヴィラ・アドリアーナ …… ３
（３）ヴィラ・デステ …… ４
７．ローマ市内見学 …… ４
（１）ナヴォーナの広場 …… ５
（２）カンピドリオ …… ６
（３）フォーロ・ロマーノ …… ６
（４）コロッセオ …… ６
（５）ヴァチカン市国 …… ７
（６）サンピエトロ大聖堂 …… ７
（７）トレヴィの泉 …… ８
（８）スペイン広場 …… ８
８．イタリアのレストラン …… ８
（１）レストランの種類 …… ８
（２）メニュー …… ９
（３）レストランでのマナー …… ９
９．ローマからフィレンツェ …… １０
（１）アッシージ見学(10月1日) …… １０
（２）シエーナ見学 …… １１
（３）サン・ジミニャーノ見学 …… １１
１０．フィレンツェの概要 …… １２
１１．フィレンツェ到着と夕食 …… １２
１２．フィレンツェ見学(10月16日) …… １３
（１）ミケランジェロ広場 …… １３
（２）ピッティ宮殿とボボリ庭園 …… １４
（３）ドゥオーモ …… １４
（４）ジオットの鐘塔 …… １４
（５）ヴェッキオ宮殿 …… １４
（６）ラウレンツィアーナ図書館 …… １４
（７）ウフィツィ美術館 …… １５
１３．アリエント通りの露店市 …… １５
１４．ボローニャ見学 …… １６
１５．ヴェネツィアの概要 …… １７
１６．ヴェネツィアの土産品 …… １７
１７．ヴェネツィアでの夕食 …… １７
１８．フランコ・マンクーソー教授の講演(10月18日) …… １９
（１）講演の概要 …… １９
（２）飲料水の確保 …… １９
（３）汚水処理 …… ２０
（４）建物の基礎 …… ２０
（５）モーゼ計画 …… ２０
１９．ヴェネツィア市内見学 …… ２０
（１）サン・マルコ広場 …… ２０
（２）サン・マルコ寺院 …… ２１
２０．ヴェネツィアでの昼食 …… ２１
２１．コモ湖畔のホテルへ …… ２２
２２．ヴェラ・デステホテルと夕食 …… ２２
２３．コモ市内見学(10月19日) …… ２３
２４．ミラーノ市内見学 …… ２３
２５．ドゥオーモ広場のジプシー …… ２４
２６．ミラーノでのショッピング …… ２４
２７．イタリアのトイレ …… ２５
２８．ローマの橋 …… ２６
（１）サンタンジェロ橋 …… ２６
（２）ヴィットリオ・エマヌエレ橋 ２６
２９．フィレンツェの橋 …… ２７
（１）ヴェッキオ橋 …… ２８
（２）サンタ・トリニタ橋 …… ２８
（３）その他の橋 …… ２８
３０．ヴェネツィアの運河に架かる橋 …… ２９
（１）リアルト橋 …… ２９
（２）小運河に架かる橋 …… ３０
３１．高速道路 …… ３１
（１）イタリアの高速道路 …… ３１
（２）ローマからオルチの間(A1) …… ３１
（３）フィレンツェからボローニャの間(A2) …… ３１
（４）ボローニャからヴェネツィアの間 …… ３２
（５）ミラーノからコモの間 …… ３３
３２．日本への帰国(10月20日) …… ３３
３３．あとがき …… ３４
【参考文献】 …… ３４

１．まえがき

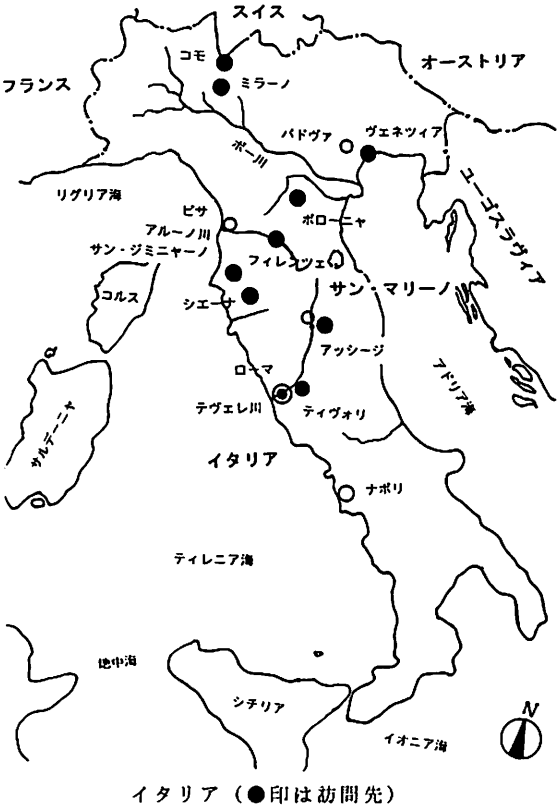
筆者は，土木・建築技術者ら１６名で構成されたイタリア見学ツアーに参加する機会に恵まれ，１９９３年１０月１３日から２１日にかけての９日間，ローマ，アッシージ，シエーナ，フィレンツェ，ボローニャ，ヴェネツィア，ミラーノの各都市を中心に，古代の遺跡，中世の建築，彫刻，美術，そして中世から現代にかけての橋，道路を見学してきた。

この紀行文は，イタリア語は勿論のこと英語すら話せない土木屋が，失敗を繰り返しながらイタリアを見聞してきた記録である。

２．イタリアのプロフィール

地中海に突き出たブーツ形の半島がイタリア半島。このイタリア半島とシチリア島など約７０の島からなる国，これがイタリア（ITALIA,英名ITALY)だ。正式名称はイタリア共和国(Repubblica Italiana)で，トスカーナ州など２０の州から成っている。

第３紀褶曲によってできた，石灰岩のアペニンニ山脈がイタリア半島を縦に貫き，東西に分断している。北部には巨大なアルプス山脈が横たわり，その裾野にはポー川が流れ，広大なポー平野を形成している。



イタリア（●印は訪問先）

位置は北緯３６度～４７度で，日本の銚子～稚内に相当する。北はフランス，スイス，オーストリアに接し，東はアドリア海を挟んでユーゴスラビア，西と南にはティレニア海を隔ててアルジェリア，チュニジア，リビアなどがある。また，国内にヴァチカン，サンマリーノの２つの独立国を内包している。

面積は日本の約８０％の３０．１万㎢。人口は日本の約1/2の５７６６万人。首都ローマは広島県とほぼ同じ２８３万人，ミラーノ１５５万人，ナポリ１２０万人と続く。

北部地方の冬はアルプス降ろしのためかなり冷え込み，南部地方の夏期はアフリカ大陸からのシロッコ（熱風）のため高温になるが，それら以外は地中海性気候で温暖である。首都ローマの年平均気温は１５度で，東京とほぼ同じ。降水量は年平均７３５㎜で，高知の1/3.5，高松の1/1.5と少ない。

３．イタリアへの旅立ち（10月13日）

朝７時，昨夜より泊まっている羽田東急ホテルで目覚める。日本を離れると当分口にすることができないであろう和食の朝食を一階のレストランで取り，予定通り８時１０分発のリムジンバスに乗る。ロシアのエリツィン大統領が訪日しているにもかかわらず道路は比較的空いおり，９時３０分に成田国際空港南ウイングへ到着する。集合時間までは，喫茶店でコーヒーを飲んだり，本屋を覗いたり，ロビーでガイドブックを読んだりして時間を費やす。

空港の免税店で煙草MILD SEVEN２０個(２８００円)，ブランデーREMY MARTIN 500mℓ（２７００円）を買い込んで，１２時４５分発アリタリア航空ＡＺ７８５便に搭乗。離陸は１３時１５分。座席はビジネスクラスである。座席の幅，肘掛の幅，前後の座席間隔ともゆったりしている。エコノミークラスに比べると天国と地獄の違いがあるとのこと。１４時３０分頃機内食がでる。ワインを飲みながら本格的なイタリアン料理に舌鼓を打つ。

飛行機は地球の回転方向と反対方向に飛んでいるため，時計が０時を回っても窓の外は明るい。飛行機はミラーノまで直行する予定であったが，気流の関係でオーストリアのウ

ィーン国際空港に降りて給油する。その後，ミラーノを経由し，約２時間遅れて５時３０分，現地時間の２１時３０分，ローマのテヴェレ(Tevere)川河口にあるレオナルド・ダ・ビンチ空港(Aerporto Leonardo da Vinci)に到着する。レオナルド・ダ・ビンチ空港は羽田空港と良く似ている。それもそのはずで，羽田空港はこの空港を真似て作られたとのこと。

今年の５月に社員旅行でハワイに行った際は，入国審査カウンターで入国の目的と滞在日数を聞かれたが，イタリアの場合はパスポートを提出し入国スタンプを受けるだけであった。

４．ローマの街の印象

ローマ(ROMA)の街に入って先ず驚いたのは，狭い道の両側にほとんど間隔を空けずに車がビッシリ駐車されていること。それと，建物が石造りで歴史の重みが感じられること，交差点に信号機が非常に少ないこと，電柱・電線が見当たらないことであった。これらはローマに限らずイタリア全ての都市に共通している。

日本では奈良や京都がそうであるように，世界的に価値の高い文化遺産の多いイタリアの都市は，第二次世界大戦でも爆撃を受けず，古い街並みがそのまま保存されている。また，古い建物の保存は法律で規制され，勝手に取壊したり，改築したりすることはできないとのこと。このため，市街部の道路は昔のままの石畳構造であり，狭く線形も悪い。地下には遺跡が沢山埋没していることもあって地下駐車場も造れないとのこと。路上駐車以外に方法がないようだ。そのためか，アメリカ車のような大きい乗用車はなく，日本と同じ小型車ばかりである。

数少ない信号機が見えるローマ市内

信号機はほとんど見当たらない。これも道路事情によると思われる。日本のようにやたら信号機が多いとかえって交通麻痺を助長するためであろう。

昔の街並みを残そうとすれば当然のことかも知れないが，日本のようにネオン，商業看板類は全く見当たらない。建物の外観からはとても想像できないが，オフィスにはコンピュータをはじめ最新のＯＡ機器が沢山導入されているとのことである。

前後ほとんど間隔を空けずに路上駐車された車の出し入れはどのようにするのか不思議に思ったので，ガイドに尋ねてみた。バンパーを当てて前後の車を動かして出るとのことであるが，自分の車がこのようにして動かされている現場を見ると，やはり怒るそうである。

５．ローマのホテル

空港からは，貸切りの大型バス(Autobus)。エクセルシオール(EXCEL SIOL)ホテルには，２２時到着する。このホテルは日本のガイドブックにも紹介されている５ツ星の最高級ホテルであるが，予想に反してロビーは狭い。

泊まり客は日本人観光客が多い。成金日本人でないとこのような高級ホテルにはなかなか泊まれないのであろう。

ロビーの椅子に座って煙草を吸う間も，荷物が盗まれないか気になる。イタリアに泥棒が多いことはどのガイドブックを読んでも書かれている。今年の春，治安が良いといわれているハワイで，目の前にいた社員の一人がパスポート，財布入りのセカンドバッグを置引きされた。今回のツァーの講師の宮脇先生（日本大学工学部建築科教授）は，海外旅行経験７５回の大ベテランであるが，昨年，バルセロナの５ツ星ホテルに泊まられた際，１２人のツァー仲間が固まって座っているド真ん中に置いてあったバッグを一瞬の内に盗まれたそうである。外国では，盗まれる方が注意不足で悪い，という認識が強いようだ。

チェック・インを済ませた後，トラベラーズ・チェック２０，０００円をリラに両替する。明日の朝，早速枕銭（チップ，２０００リレ）が必要になるからだ。レートは，１リラが０．０７円（１４リレ／円，複数の場合はリレという）である。昨年までは１リラが０．１円であったとのこと。海外旅行者にとって円高は本当に有難い。

イタリアのどのホテルにも，石鹸，シャンプーは備えられているが，日本のように歯ブラシ，カミソリ，室内スリッパはない。浴室には，必ずビデ用の便器が備え付けるられている。これに水をためて，局部や肛門を洗浄するのだそうだ。室内には日本と同じように小さい冷蔵庫があり，飲み物が入っているが，値段が異常に高い。コーラやジュースは１缶４５００リラ（３１５円），ミネラルウオーターは５０００リラ（３５０円）。

ホテルの部屋から日本へは直通，もしくはＫＤＤを直接呼び出してコレクトコールで電話することができる。イタリア語や英語を話さなくても良いので非常に便利である。日本への通話料は１分当たり１０００円程度。この他に，コレクトコール通話をした場合，ホテルによっては３５００リラの電話使用料が取られる。

今日は本当に長い一日であった。１日が３２時間であったので無理もない。

ベットに就いたのが２時前であったにもかかわらず４時半頃目が覚める。完全に時差ボケ状態に陥っている。仕方がないので，成田空港で買って来たブランデーを飲みながらガイドブックを読む。

７時，朝食は１階のロビー奥のレストランであると聞いていたので，エレベータに乗り１Ｆのボタンを押す。ところが，扉が開いて降りた所に昨夜のロビーがなくなっている。ヨーロッパは階の呼び名が日本と違い，２階が１Ｆなのである。

朝食はバイキング方式。メニューを見て注文する必要がないので助かる。料理は，ハム，チーズ，ヨーグルト，果物（イチゴ，パイナップル，オレンジ，トマト，洋梨，キウイなど豊富）。パンは小さなフランスパンとクロワッサン。イチゴ以外は日本より格段に美味しい。ただ，ハワイのように和食はない。

６．ティヴォリ見学（10月14日）

（１）ローマ郊外

８時３０分ホテルを出発し，高速道路Ａ２４を貸切りバスで走る。ローマ市内から少し郊外に出ると，近代的なマンションが立ち並ぶベットタウンが現われる。これとは対照的に，日本では御目に掛かれないような粗末な小屋の密集する集落が所々に見られる。これがジプシー部落だ。さらに郊外へ走るとのどかな農園地帯が広がり，羊や馬が放牧されている。日本に比べて人口密度の少なさが良く判る。

ローマ郊外の風景

（２）ヴィラ･アドリアーナ

ローマ市内から北東に約３０km走るとティヴォリ（Tivoli)に着く。ローマ帝国時代から皇帝や法王などが好んで別荘を建てた地だ。

先ず，ハドリアヌス帝が別荘として１３４年に完成させたとされるヴィラ･アドリアーナ(Vila Adriana) を見学する。アテネの柱廊を摸した彩色柱廊(Pecile)，海上劇場(Teatro Marittimo)，共同浴場(Terme)，いけす(Vivaio)などの跡が残されている。廃墟化しているが，豪華な建物であったことが想像される。建物はいずれも直方体のレンガを積み重ね，レンガどうしをモルタルで結合されている。当時，既にセメントが発明されていたこともさることながら，１８５０年を経過した現在でもモルタルがほとんど風化していないのには驚嘆する。

共同浴場跡（ヴィラ・アドリアーナ）

プール長100mのカノーポス(ヴィラ・アドリアーナ)

オルガンの泉（ヴィラ・デステ）

百の泉の小路（ヴィラ・デステ）

楕円の泉（ヴィラ・デステ）

階段の噴水（ヴィラ・デステ）

（3）ヴィラ・デステ

ティヴォリの市内を抜け，オリーブ畑を通り，山の上へと登っていくと噴水の庭園として世界的に有名なヴィラ・デステ（Villa D' Este，エステ家の別荘)に着く。庭には，ベルニーニの「楕円の泉」を初め，１００種類の動物の顔から水が吹き出す「百の泉の小路」，「滝の泉」，「オルガンの泉」など大小の噴水が沢山ある。階段に設けられた噴水のアイデアーも面白い。山の上にあるのに，多量の水がどこから供給されているのか不思議である。１５世紀にこれだけの芸術を造り上げたイタリアの水道，建築技術には驚嘆させられる。

大阪の万国博覧会の折りに，多くの関係者が噴水の勉強のためここを訪れたそうである。

東京ディズニーランドでは，入り口の階段の手摺の中から音楽を流しているが，音楽と共に水を出すとさらに面白いものができるのではないかと想像する。

7．ローマ市内見学

午後は再びローマに引返し，ナヴォーナの広場，パンテオン，カンピドリオ，フォーロ・

ロマーノ，コロッセオ，ヴァチカン市国，スペイン広場などを見学した。その主なものだけを紹介する。

（1）ナヴォーナの広場

観光の名所として有名なナヴォーナの広場(Piazza Navona)は，紀元８６年に造られた，長さ２４０ｍ，幅６５ｍの広場。周囲が家に囲まれているため車は入れない。広場に面してサン・アニェーゼ・イン・アゴーネ教会がある。

広場には，１６５０年代に造られたベルニーニ作の噴水が３つある。「ムーア人（黒人）の泉」，「大河の泉」，「ネプチューンの泉」だ。どれもバロック様式を代表する彫刻。

中央の「大河の泉」は，世界の４大河川（ナイル，ガンジス，ドナウ，ラ・プラダ）を男性像で表現したもの。ナイルが頭から頭巾を被り，ラ・プラダが左手を上げて身を守る姿をしてる。これは，ベルニーニと仲の悪かったボッロミーニ設計のアゴーネ教会に対して，ナイルが「見るに耐えない」と布を被り，ラ・プラブが「倒れてきそうな教会」と手を上げているのだそうだ。

広場の様子(ナヴォーナ広場)

大河の泉(ナヴォーナ広場)

ナヴォーナの広場(ローマ)

「ネプチューンの泉」は，海神ネプチューンとトリトーン（半神半魚の海神）の像。

広場は市民や観光客，絵を描いて売る二流の画家，ギターを弾く音楽家で賑わっている。また，歩きながら，あるいはベンチに腰掛けて濃厚な接吻，さらには女性の股倉に手を入れている若いカップルが沢山いる。このようなカップルは，この広場以外でもよく見かけた。イタリアの若者は，真昼間から一体何を考えているのか！

（2）カンピドリオ

カンピドリオ(Campidoglio)は英語のキャピタル(Capital=首都)の語源。ここは古代ローマの宗教の中心であった。

１５３６年，ミケランジェロの設計した広場の周りには，３つの宮殿とユピテル神の双生児の像がそびえる欄干がある。広場の中央には，青銅で造られたマルクス・アウレリウス帝の騎馬像があったが，現在はずされて台座だけが残っている。

（3）フォーロ・ロマーノ

フォーロ・ロマーノ(Foro Romano)とは，古代ローマ時代の遺跡が残る広場（フォーロ）。助言者の神々の柱廊，アポロ神殿，ベッローナ神殿，マメルティヌスの監獄，セッティミウス・セヴェルスの凱旋門，コロッセオなど，１９世紀から２０世紀にかけて発掘された多数の遺跡が見られる。だが，遺跡から当時の状況を想像するのは難しい。

（4）コロッセオ

コロッセオ(Colosseo)は，８０年に建設された娯楽のための演技場。当時は，「フラヴィオ円形劇場」と呼ばれていたそうだ。長径１８０m，短径１５０m，高さ５７mで収容人員は５万人を越えたという。ホノリウス帝が４０４年に中止の勅令を出すまで３００年間にわたって，剣闘士の試合や猛獣との戦いなど残酷な闘技が毎日のように繰り返され，

カンピドリオ広場(ローマ)

ユピテル神の双生児の像(カンピドリオ広場)

古代の遺跡(フォーロ・ロマーノ)

古代の遺跡(フォーロ・ロマーノ)

ローマ市民を熱狂させていたようである。コロッセオの語源は，「殺せよ」ではない。この建物が巨大(コロッサーレ)であったことからだそうだ。

その後地震や落雷の被害を受けたり，ルネサンス時代以降は教会建設のための大理石の供出場となり，現在の中途半端な形を留めている。

（5）ヴァチカン市国

ローマの繁華街からテヴェレ河を渡って西へ緩やかな丘の斜面に，世界最小の独立国「ヴァチカン市国(Città del Vaticano)」がある。周囲に築かれた城壁とサン・ピエトロ広場(Piazza San Pietro)の柱廊とによってイタリアから切り離されたこの国の面積はわずか４４ｈａであるが，年間２００万人の巡礼者と観光客が訪れるそうである。この国には，信徒９億人を擁する世界最大の宗教カトリックの総本山であり，初代教皇聖ペテロらが眠るサン・ピエトロ大聖堂がある。

（6）サン・ピエトロ大聖堂

サン・ピエトロ大聖堂(Basilica di San Pietro)は，奥行き１９２．７６ｍ，天井の高さ４４．５ｍ，聖堂の上にそびえるクーポラ(Cupola，大円蓋)最上部までは，地上から１３６．５ｍ。世界最大規模の教会堂だ。１５０６年，ルネサンス絶頂期の教皇ユリウス二世の命で建築が開始され，完成するのに１００年以上を要したとのこと。

大聖堂入り口には，ミケランジェロがデザインしたといわれるカラフルな制服を着たスイス兵（ヴァチカン市国は兵を持っていないため）が微動だじもせず，人形のように立っている。

大聖堂の内部にはミケランジェロ作のピエタの白大理石像など多数の像，フレスコ画がある。中央のクーポラはミケランジェロの設計によるもので，頂上へはエレベーターあるいは５３７段の螺旋階段で上がることができる。

大聖堂の正面には，円柱列の回廊に囲まれた壮大な広場がある。これがサン・ピエトロ広場(Piazza S.Pietro)だ。観光客が沢山いるが，広場があまりにも広いため，スペイン広場やトレヴィの泉のようには混雑していな

サン・ピエトロ広場(ヴァチカン市国)

サン・ピエトロ大寺院(ヴァチカン市国)

ヴァチカン市国入り口の警備兵

い。

サン・ピエトロ大聖堂に隣接したシスティーナ礼拝堂には，ミケランジェロが４年半の歳月を要して描いた天井画，晩年の大作である壁画「最後の審判」などのフレスコ画がある。

（７）トレヴィの泉

トレヴィの泉(Fontana di Trevi)は，ローマの中で最も有名な泉。ニコラ・サルビーノの作で，三叉路（トリヴィオtrivio)に位置していたためトレヴィの泉と命名されたとのこと。

この泉の縁に後ろ向きで立って，右手にコインを持ち左肩越しに投げれば，最初のコインは「ローマを再び訪れることができ」，２つ目のコインは「素敵な恋人にめぐり会えることができ」，３つ目のコインを投げると「嫌な人と別れることができる」との伝説がある。このためか，若い女性の観光客が沢山集まっており，泉の縁に近付き難い程であった。

（８）スペイン広場

スペイン広場(Piazza di Spagna)と呼ばれるのは，広場の西側にある建物が１７世紀からスペイン大使館として利用されていたことに由来するそうだ。広場の上には１７２６年に造られたスペイン階段がある。名画「ローマの休日」でオードリ・ヘップバーン扮する王女がソフト・クリームを舐めながら降りたのもこの階段である。

観光客がとにかく多いため，階段を登ることなく下から写真撮影のみした。

８．イタリアのレストラン

今夜は，２０時３０分からローマ市内のレストランで晩餐会が開かれる予定である。ホテルで風呂に入りドレスアップし，２０時１０分全員タクシー(Taxi)に分乗して，宮脇先生推薦のリストランテ，パパジオン・ワンへ行く。

（１）レストランの種類

トレヴィの泉(ローマ)

スペイン広場(ローマ)

イタリアのレストランは，食事の内容によって，名称が分かれている。バール(Bar)と呼ばれる店は，日本でいう喫茶店。ピッツェリア(Pizzeria)はピザの専門店。カフェテリア(Caffetteria)，ダボーラ・カルダ(Tavola Calda)，ロスティッツェリア(Rosticceria)は，カウンターに並ぶ料理を指して受け取る，セルフ・サービス形式の店。トラットリア(Trattoria)，オステリア(Osteria)は，値段も雰囲気も気軽な大衆食堂。リストランテ(Ristorante)は本格的なレストラン。二流のリストランテは気軽に入れるが，高級リストランテになると予約の上，ジャケットにネクタイ姿で入らなければならないとのこと。

パパジオン・ワンはグルメブックにも掲載されている高級レストランとのことであったので，豪華な内装の店を思い浮かべていたが，予想に反し日本のスナックにテーブルを並べたような狭い店。周囲の壁の棚には沢山の種類のワインが並べられている。店内はドレスアップした客で満席状態である。

（2）メニュー

ローマ市内を巡回する警察

ウエイターが来てリスタLista（メニュー，カルタCartaともいう)を手渡される。先ず，ノンガス・ミネラル・ウォーターとホワイト・ワインを注文する。西洋では，水は注文しないと出てこない。ミネラル・ウォーターにはノンガスとコンガスの２種類がある。西洋人は一般にコンガスを飲むようであるが，これは，二酸化炭素が入っており，サイダーのような味がする。飲み慣れていない日本人の口には合わないように思う。ノンガスかコンガスかの見分け方は，ビンのラベルが赤色のものがノンガスである。

リスタは①アンティパスト(Antipasto,前菜)，②ズッペ・エ・ミネストレ(Zuppe e Minestre,スープ類)，③プリモ・ピアット(Primo Piatto,第１の皿)，④セコンド・ピアット(Secondo Piatto,第２の皿)，⑤コントルノ(Contorno,付け合わせの野菜)，⑥フルッタ(Frutta,果物)，ドルティ(Dolci,デザート）から構成されている。前菜は生ハム，野菜など。第１の皿はスパゲッテイ，リゾット。第２の皿は肉または魚料理のメイン・ディシュ。コントルノは第２の皿に付け合わせる野菜やサラダである。

（3）レストランでのマナー

高級レストランでは，一般に，第１の皿から１品，第２の皿の肉料理か魚料理のいずれかから１品，そしてデザートを選ぶのが普通。第１の皿のスパゲッテイは量が多い。これだけで日本人は満腹になるが，第１の皿だけで終わらせるのは，かなりのマナー違反とのこと。第１の皿は３人で２皿くらい注文すると丁度である。

最後は，小さなカップに入った，エスプレッソコーヒーを飲むのが普通。しかし，エスプレッソは苦くて私には飲めなかった。それで何時も食後の後では，カプチーノ（コーヒーの上にミルクを泡立てて浮かしたもの）を注文していた。帰国後にガイドブックを読むと，「食後にカプチーノを飲むのはイタリア人にとってかなり奇異にうつる。エスプレッソが苦手な人は，カフェ・ルンゴ(Caffé Lungo)かカフェ・アメリカーノ(Caffé Americano)を注文すると良い」と，書かれてあった。

その他のマナーとしては，食事中に大声で話さない，煙草はデザートが終わりコーヒーが運ばれてくるまで控える，とのこと。ワインを飲みながら煙草を吸えないというのは，ヘビー・スモーカーにとって大変つらい。

９．ローマからフィレンツェ

（１）アッシージ見学(10月15日)

昨夜もベットインは１時頃であったが，今朝も４時過ぎに目が覚める。以前として時差ボケ状態にある。

ホテルを８時に出発。貸切りバスに乗ってＡ１高速道路を走りオルテへ。オルテからはＳ３高速道路に乗り替えナルニ，トーディを経由してペルージアへと走る。ペルージアから一般道路を通り１１時アッシージに着く。

アッシージ(Assisi)は，イタリア共和国の守護聖人と呼ばれている聖フランチェスコの生地である。フランチェスコは１１８１年に裕福な織物商の息子として生れた。２０歳のとき，板絵の十字架のキリストから「フランチェスコよ，行け。そして崩れかけている私の家を建て直すのだ」と命令を受ける。それで，民衆から遊離したカトリック教を再び民衆のあいだに取り戻すため，つまり「神の家を建て直す」ために，「清貧」「純潔」「従順」の三つの戒律を掲げた「小さき兄弟会」後の「フランシスコ修道会」を創立し，生涯を布教活動に尽くす。

アッシージに入ると前方のスバシオ山の中腹に戦艦のように巨大な建物が目に入る。これが，聖人フランチェスコの遺体を安置したサン・フランチェスコ大寺院(Basilica di San Francesco)だ。大寺院は，聖人の死後，聖人を安置するため，全ヨーロッパのフランシスコ修道会関係者から寄附を募って，１４０年の歳月をかけて１３７０年に完成されたものである。

寺院は上下二層の教会からなっている。下の教会はロマネス・ゴシック折衷様式で天井が低く，内部が薄暗い。一方，上の教会はゴシック様式で天井が高く，内部も十分採光に配慮され明るい。１４０年間の建築様式の変遷を目の当たりにみることができる。上の教会には，ジョットの描いたフレスコ壁画「聖フランチェスコの伝記」が見られる。

サン・フランチェスコ通り(Via San Francesco)には，羊の腸のようにつづら折れとなった斜路の道と，それを階段で短距離に結ぶ道とがある。つづら折れの斜路は，羊が通るうちに自然にできた道で，階段は人間が速く通るために作られた道だそうだ。

サン・フランチェスコ大寺院とサン・フラ

サン・フランチェスコ大寺院（アッシージ）

サン・フランチェスコ通り（アッシージ）

ンチェスコ通りを見学した後，バスの中でサンドイッチをかじりながら，１２時シエーナ(Siena)に向かう。ペルージアを過ぎると左手に巨大な湖トラジメーノ湖(Lago Trasimeno)が見える。

（２）シエーナ見学

シエーナ到着は１４時３０分。丘の上にオレンジ色に近い茶色で統一された街並みが現われる。絵の具のシエーナ色は，この街の壁の色から名付けられたとのこと。

街の中央には世界で最も美しい広場といわれるカンポ広場(Piazza del Campo)がある。広場は扇形をしており，煉瓦が敷き詰められている。扇の根元に当たる所へ水が集まるように勾配が着き，排水口が設けられている。広場の高い所の中央には，シエーナ派の代表的彫刻家J.D.クエルチャ作のコピーである「喜びの噴水(フォンテ・ガイア)」がある。カンポ広場では年２回，有名な「パリオ祭」が繰り広げられ，身動きが取れない程集まった観衆の周囲を裸馬が走って競争するそうだ。煉瓦が敷き詰められた所を馬がよく走れるものだ。

カンポ広場の正面には，１４世紀中期にゴシック様式で建てられた，高い塔のそびえるプッブリコ宮殿(Palazzo Pubblico) がある。現在は市役所として使われている。

カンポ広場を取り囲むようにシエーナの街が形成されている。幅員４ｍ程度の石畳の道路も，この広場から放射状に出ており，道路の両側には店舗の入ったレンガ造りの建物が密集している。

ある果物屋で，松茸に良く似ているが，松茸よりも一回り大きい茸を見つけた。これは，シエーナ近郊で採れるポルチーニ茸。

シエーナの街並み

見学の後，カンポ広場でシエーナ市都市計画課の職員から，シエーナの歴史の説明を受ける。通訳は，添乗員のアイリーン。説明の途中，それまで晴天であった空が暗くなり，急に土砂降りとなる。山の天気は変わり易いというが，この変化の早さには驚いた。

１６時，次の目的地であるサン・ジミニャーノに向かう。

カンポ広場（シエーナ）

街燈（シエーナ）

（３）サン・ジミニャーノ見学

サン・ジミニャーノ(San Gimiginano) 到着は１７時。丘の上に沢山の高い塔がそびえている。１２～１３世紀頃，貴族たちが権力を誇示するために，競って高い塔を建てたとのこと。当時は７２基も乱立していたそうだが，現在は１４基が残っている。

薄暗くなっていたのでチステルナ広場(Piazza della Cisterna)，ドゥーモ広場(Piazza del Duomo)などを駆け足で見学し，１８時３０分フィレンツェに向かう。

１０．フィレンツェの概要

フィレンツェ(Firenze，英名Florence）とは，「花の都」の意味で，ルネサンス期に花開いた，約３km四方の小さな街。市内は，北西から南東へ対角線を描くようにアルーノ川が流れ，市内を二分している。

川の北側には，花の大聖堂と言われている美しいドゥオーモがあり，このドゥオーモを中心に道が放射状に延び，ドゥオーモ周辺に観光の名所やショッピングゾーンが集まっている。川の南側は小高い丘になっていて，ピッティー宮殿やミケランジェロ広場などがあり，フィレンツェの街全体のパノラマを楽しめる。

フィレンツェは街そのものが美術館といってよく，ルネサンス期の教会，貴族の邸宅，ミケランジェロなどの彫刻が至る所で見られる，世界に類のない美しい町と言われている。

１１．フィレンツェ到着と夕食

フィレンツェのホテル，サヴォイ(Savoy)に到着したのは２０時を過ぎていた。夕食は，岡下，岡島，平松，安田の各氏と連れ立って，ホテルの前の共和国広場(Piazza della Repubblica)の横にある，あまり高級そうでないリストランテに入る。平松さんはフランス旅行を６回経験しているだけに英語が達者であるので，注文をお願いする。

先ず飲み物は例によってノンガス・ミネラル。ワインは，肉料理に合う赤ワインとする。プリモ（第１の皿）は無難なところで，アサリのスパゲッティに決める。フィレンツェは，トスカーナ州産の仔牛肉のステーキが有名であると聞いていたので，セコンド（第２の皿）は，ビーフ・ステーキを２００ｇを頼む。

どこの店でも同じであるが，最初に，注文してなくても飲み物と同時にパンがでてくる。ローマでは小さいフランスパンとクロワッサンであったが，フィレンツェでは何故かスライスに切ったフランスパンと，長さ３０cm位の細長いお菓子のような袋入りの乾パンが出てくる。

最初に出された赤ワインは，冷やされておらず美味しくない。「二流のレストランではワインも冷やさずに出すのだろうか」と言う

ミケランジェロ広場からのフィレンツェのパノラマ

と，「赤ワインは普通冷やさずに飲むもの」と平松さんに教えられた。

アサリのスパゲッティは味は良いのであるが，アサリの砂抜きが十分なされていなていため，食べるとジャリジャリする。山の中の都市でアサリを注文したのがまずかったのかと反省する。

次に，骨付の巨大なビーフ・ステーキが出された。間違いのないように岡島さんが数字を紙に書いて注文したはずであるのに，どう見ても２００ｇではない。肉は柔らかくて美味しかったのだが，ほとんど平らげたのは平松さんだけで，他の４名は３分の２を食べるのがやっとであった。後日，添乗員にこのことを話すと，イタリアでは２を５と読むとのこと。なぜ５に読めるのだろうか。

食事を終えると２２時を過ぎており，商店は全て閉店になっていた。

１２．フィレンツェ見学（10月16日）

フィレンツェではこれまで毎日のように雨の日が続いていたようであるが，今朝は晴天。ラッキーである。今日の主な予定は，市内見物とショッピング。

先ず最初にミケランジェロ広場に登り，市内を一望した後，ヴェッキオ橋，ピッティ宮殿，ボボリ庭園，サンティッシマ・アンヌンツィアータ広場，サンティッシマ・アンヌンツィアータ教会，メディチ家礼拝堂，サン・ロレンツォ教会，ラウレンツィアーナ図書館，ドゥオーモ，ジオットの塔，ウフィッツィ美術館と見て回る。

（１）ミケランジェロ広場

８時３０分ホテルをバスで出発し，町並みが一望できる丘の上のミケランジェロ広場(Piazzle Micherangelo)に登る。広場の中央にはミケランジェロ作ダヴィーデのコピーが建っている。ここは，ほとんどの観光客が訪れる名所だそうだが，日本人観光客も沢山いる。観光客目当ての露店も沢山だされており，カラフルなスカーフや仮面，陶器の皿などの土産物が売られている。

ここからの展望は素晴らしく，ドゥーモ，鐘塔，アルーノ川，ヴェッキオ橋などが一望できる。

ドゥオーモとジョットの鐘塔（フィレンツェ）

ミケランジェロ広場の露店

ボボリ庭園とピッティー宮殿

（２）ピッティ宮殿とボボリ庭園

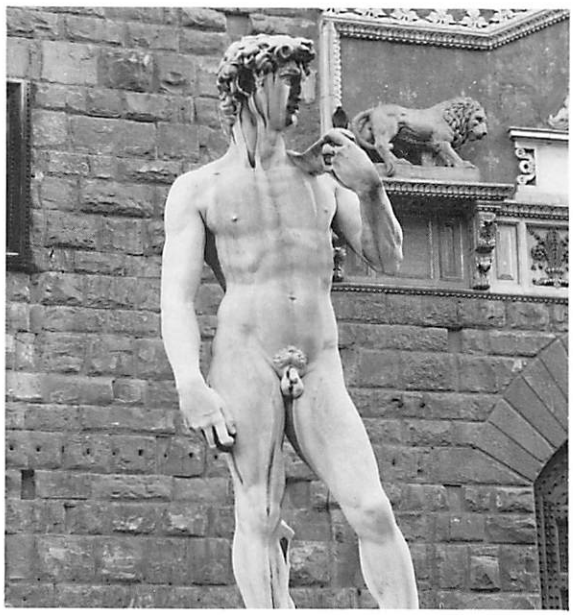
ピッティ宮殿(Galleria Pitti)は，豪商ルカ・ピッティによって１５世紀に建てられたフィレンツェ最大の宮殿。１６世紀にメディチ家に買い取られてから，さらに建物が広げられ，高さ３６ｍ，横幅２０５ｍの現在の姿になったもの。宮殿内には３つの博物館と美術館があり，ラファエロ，ボッティチェリ，ルーベンヌなど，メディチ家が収集した約５００点の絵画などが展示されているとのこと。

ピッティ宮殿の中庭を抜けて奥に入ると，１５５０年にトリボロの設計で造られたといわれる広大なボボリ庭園(Giardine di Bobol i)がある。

（３）ドゥオーモ

１２９６年に着工し，１４３６年に完成したもので，正式名称は「花の聖母教会(Santa Maria del Fiore)」。

正面の３つのドアは，パッサリオとカッシオリの作。フィレンツェ・ゴシック様式の代表的な建築物で，円蓋の天井には「最後の審判」のフレスコ画が描かれている。後陣の礼拝堂には，ミケランジェロの傑作「ピエタ像」



ミケランジェロ作ダヴィナ像（ヴェッキオ宮殿前）

がある。ドゥオーモの頂上には４６３段の階段を登れば上がることができる。

（４）ジオットの塔

ドゥオーモの南側に立つ，高さ８４．７ｍの塔(Campanile di Giotto)。ジオットの設計で１３３４年に着工し，１３５９年に完成したもの。４１４の階段を登れば塔の最上階へ上がることができる。

（５）ヴェッキオ宮殿

ヴェッキオ宮殿（Palazzo Vecchio)は，修道院長の邸宅として１３１０年に建てられた宮殿。高さ９４ｍの塔がそびえている。

宮殿の正面には，ミケランジェロ作ダヴィデ像，バンディネッリ作ヘラクレスとカクス群像など様々な彫刻が並んでいる。ただし，ダヴィデ像のオリジナルは１８７３年に現在のコピーに取り換えられている。

（６）ラウレンツィアーナ図書館

ラウレンツィアーナ図書館(Biblioteca Laurenziana)は，メディチ家のコシモ・イル・ヴェッキオによって創設された図書館。図書館の入口には，ミケランジェロによって設計された，この上ない優美な階段がある。階段は１５段あり，上ほど階段の幅員が狭くなっているのであるが，最上部に立って眺めると全く同じ幅の階段に見えるのが何とも不思議である。階段の幾何形状にトリックがあるのであろう。

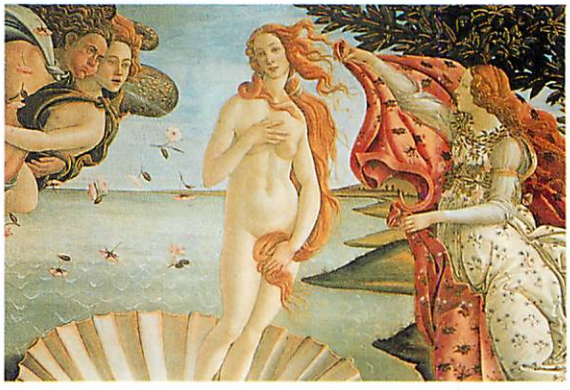
ラウレンツィアーナ図書館の階段(ミケランジェロ設計)

ボッティチェリ作マドンナ(ウッフィツィ美術館)

(7) ウフィツィ美術館

世界で最も美しい絵画美術館の一つ。ウフィツィとはイタリア語でオフィスを意味する。ウフィツィ美術館(Galleria degli Uffizi)は，１５世紀～１６世紀にかけてのルネサンス期に，トスカーナ地方で実権を握っていたメディチ家のオフィスであり，メディチ家が２世紀にわたって収集された美術品が収納されている。

美術館には，ボッティチェリ作の「マドンナ」，「春」，「ヴィーナスの誕生」，レオナルド・ダ・ヴィンチ作の「受胎告知」，ミケランジェロ作「聖家族」など，世界的な名



ボッティチェリ作ヴィーナスの誕生

ミケランジェロ作聖家族（ウッフィツィ美術館）

画が無数に展示されている。今まで写真では見たことがあったが，実物の持つ美しさと迫力には，これまでに経験したことのない感動を覚えた。

また，廊下の天井一面に描かれたフレスコ画も大変美しい。フレスコ画は何年経っても色が変色しないのが大きな特徴だ。フレスコ画とは，下地の漆喰が乾ききらないうちに水溶性顔料で描かれたものであり，漆喰が乾ききらないうちに描くためには，スピードが要求され，一度に５０cm四方くらいずつしか描けないそうである。精密に描かれたフレスコ画を見ていると，とても人間業とは思えない。

１３．アリエント通りの露店市

アリエント通り(Via dell Ariento)は，サン・ロレンツォ教会わきの通り。細い道の両側に露店市がズラリと並び，高知の日曜市

アリエント通りの露店市

のようである。ローマには至る所に露店市が出されているが，アリエント通りの露店市の規模が最も大きい。

ここでは，革ジャン，バッグ，ベルト，靴等の革製品や，カラフルな模様のスカーフ，ネクタイ，ビーズのネックレス，仮面，文房具などいろいろなものが売られており，観光客や地元の人々で賑わっている。

ガイドブックには，「ここでは市価よりも安く買える」と，書いてあったが，ショーウィンドーのある店に比べる質がかなり劣るように思える。また，ガイドブックに，「ここで買う場合には値切るのが良い」とに書かれていたので，電卓を片手に「ディスカウント，プリーズ」と片言の英語で値段交渉を試みた。だいたい，値札の１０～１５％は値下げしてくれるようである。店員が陽気で明るいのでショッピングがとても楽しい。

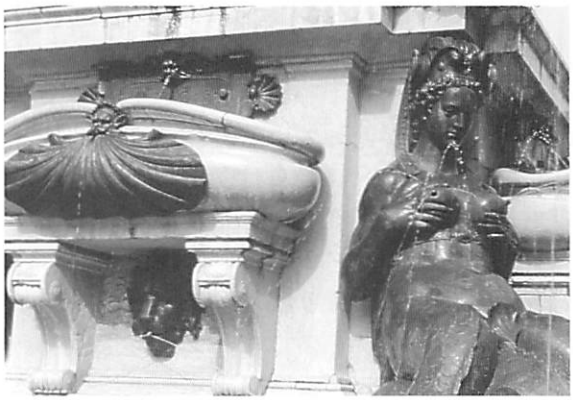
１４．ボローニャ見学

アペニンニ山脈を越えるとボローニャ(Bologna)。ポー平野の最南端に位置している。ボローニャに入ると再び平地が広がる。ボローニャは北イタリア有数の工業都市で，鉄鋼，電機，靴などが主な産業。

ボローニャ到着は１０時５０分。ボローニャの市街地で先ず目に止まったのが，近代的な高層建築物。これは，日本の丹下健三氏の設計とのこと。

ボローニャでは，マジョーレ広場(Piazza Maggiore)を中心に見物する。マジョーレ広場には市庁舎，ネプチューンの噴水，斜塔など集まっている。

ボローニャの街



ネプチューンの噴水

ガリセンダの斜塔とアジネルリ家の塔

マジョーレ広場の中にあるネプチューンの噴水は，１５６６年に造られたジョヴァンニ・ダ・ボローニャの作で，１６世紀の最高傑作の一つとされている。ブロンズの彫刻でできたネプチューン（海神）像の回りの人魚の乳

首から噴水がでていて愉快である。

マジョーレ広場の２００m程東に２基の塔がそびえ立っている。高い方の塔はアジネルリ家の塔と呼ばれ，１１０９年の建造で，高さは９８m。もう一つの塔はガリセンダと呼ばれる塔で，高さ５０m，しかも３m傾いている。ガリセンダの塔は，ピサの斜塔を意識して，最初から傾斜させて造られたといわれている。

１５．ヴェネツィアの概要

ヴェネツィア(Venezia,英名ベニスVenice)は，潟（ラグーナ）を埋立てて造成された島であり，島の中を１つの大運河と１６０余りの小さい運河が通っている。島の交通は舟と徒歩のみである。自動車は勿論のこと，自転車も通れない世界唯一の都市である。

ローマ広場でバスから降り，海上タクシーと呼ばれる１０人乗り程度のモーターボートに乗る。スーツケースはポーターによって，ベルトコンベヤーでモーターボートに積み込まれる。運河には約４００橋の橋が架かっているとのこと。次々に現われるアーチ橋のあまりにもの美しさに思わずカメラのシャッターを押し続ける。アーチ橋をモーターボートで潜り抜けながら走り，サン・マルコ運河(Canale di S.Marco)に出ると，運河沿いにサンタ・マリア・デッラ・サルーテ教会，サン・ジョルジョ・マッジョーレ教会，サン・マルコ教会，鐘楼などの美しい建物が海上に浮かぶように見えてくる。ヴェネツィアは，造成された土地の高さと海面との高低さがほとんどないため，建物が海上に浮かんで見える。

海上に浮かぶサンタ・マリア・デッラ・サリーチ教会

海上に浮かぶサン・ジョルジョ・マッジョーレ教会

ゴンドラ

まさに，水の都，水上都市だ。別世界だ。おとぎ話の世界に入って来たような錯覚に陥る。

１７時，ホテルダニエリに到着する。ホテル前の広場には土産物を売る露店が沢山でており，観光客で溢れている。相変らず日本人観光客の姿が目に付く。２日ほど前まではこの広場も完全に水没していたとのことであるが，今日は水が退いていて長靴の必要がない。

１６．ヴェネツィアの土産品

ホテル・ダニエリ(DANIELI)も５ツ星の最高級ホテルとあって，ロビーや廊下のインテリ，壁に掛けられているルネサンス期の絵画が素晴らしい。まるで，美術館のようである。

ホテルでチェックインを済ませてから，岡下さんと岡島さんの３人でヴェネツィアの夜の街の散策に出かける。

迷路のように入り組んだ小さい路地の両側には，ムラーノのガラス細工，革製品，絹のスカーフやネクタイ，仮面などを売る店が軒を並べている。

ムラーノのガラス工芸品を売る店

ムラーノのガラス細工はとてもきれいである。最初，「村野」という日本人の名前を付けたブランド名かと思って，ガイドブックを調べると，ヴェネツィアにムラーノ(Murano)という島があり，１２９２年以来ガラス工芸の一大中心地になっていて，ここで作られたガラス製品であるとのこと。

絹織物はとにかく安い。ネクタイは１万リラ（７００円）から売っている。２．５万リラも出せば，日本では１万円くらいすると思われるシルク１００％のものがある。革靴も１０万リラ出せば，革質の良いものが買える。試しに履いてみたが，どの靴も細長く，足の幅が広い日本人には合わないようである。

仮面は，２月中旬から３月前半頃までの間に開かれるカーニバル（謝肉祭）の際にかぶるのだそうだ。大小のカラフルな仮面が沢山売られている。小さい仮面もあることを考えると，顔に被るだけでなく，壁などにも飾るのであろう。

ベネツィアはサン・マルコ広場を中心に街が広がっている。商品の値段はサン・マルコ広場周辺の店のものが一番高く，サン・マルコ広場から遠ざかるほど安くなるそうである。確かにその通りであるが，私の見る限り品質も悪くなっているように思えた。

陣内秀信氏の著書に，「ベネツィアは娼婦の街であり，かっては人口の１割が娼婦であった」と書かれていたので，気を付けて見たがそれらしき女性は見当たらなかった。

１７．ヴェネツィアでの夕食

ヴェネツィアは漁業の盛んな街であり，魚の種類も多いと言われている。日本では毎日のように魚を食べているのに，イタリアに来て魚を全く口にしていなかったので，何としても魚料理を食べようと，路地を捜して歩いた。そして，ようやくショーウインドーに鰻やイサギなどの魚を並べた「センピオーネ(SEMPIONE)」という１軒のレストランを見つけた。が，扉が閉まっている。開店は１９時からとのこと。イタリアのレストランの開店時間は，１２時から１５時と１９時から２４時が多いようである。開店をまって中に入るとウェイターが窓側のテーブルに案内してくれた。最初，運河が見え，眺めの良いテーブルだと喜んでいたのだが，ドブ臭くてとても食事ができる状態ではない。それで奥のテーブルに変更してもらう。

ここでも例によって，まず，ノンガス・ミネラルウオーターと白ワインを注文し，メニューに目を通す。メニューはイタリア語と英語の２通りで書かれているのであるが，魚の英語名が判らないのでどうしようもない。イタリアでは，どこのレストランも日本のように写真入りのメニューが置かれてない。これは非常に不便である。

メニューを見るのに必死になっていたので，ウエイターがきたのに気が付かなかったが，テーブルにパンとミネラルが並べられていた。また，口の大きい花瓶のような陶器の入れ物が置かれていた。中に入っているものは水のようであるが，少し色が着いている。手を洗うにしては，器が少し小さい。不思議に思って臭ってみると，ワインのようでもある。
そうしていると，隣の席で食事していた２人連れのイタリア人(？)の婦人が，ワインだと教えてくれた。これまでのレストランでは，瓶入りのワインばかりであったので，ワインとは気がつかなかったのである。

メニューが判らなくて困っていると，ウェイターが来て片言の日本語で説明してくれた。それで，先ず，エビとイカのリゾット，かたつむりのワイン蒸しを注文した。それを食べた後，焼魚が食べたかったので，ショーウインドーに並べてあったイサギのグリルを頼んだ。すると，ウェイターが大袈裟な手振りを

ヴェネツィアの路地

して，とても値段が高いというので，いくらか尋ねると，１匹２万リラだと言うのである。１４００円は高くはない。「オッケー，グリル，プリーズ」と注文すると，大袈裟な表情で大喜びした。そして，料理された魚をテーブルに運んできたとき，骨をきれいに取って，食べ易くしてくれたのには驚いた。サービス満点である。

魚料理をたらふく食べ，ワインを飲んで総額５万リラである。日本では考えられないような安さだ。

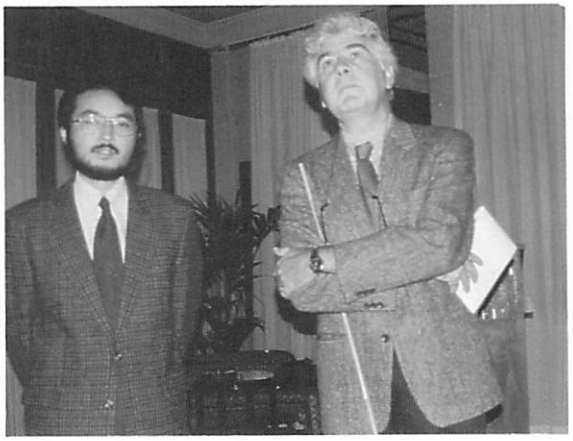
１８．フランコ・マンクーソー教授の講演（１０月１８日）

（１）講演の概要

ホテルダニエリのマルコポーロの間でヴェネツィア建築大学のフランコ・マンクーソー教授(Prof.FRANCO MANCUSO)より，８時から２時間にわたりヴェネツィアの都市計画と題しての講演を受ける。

マンクーソー教授は，「水の都ヴェネツィア」などヴェネツィアに関する多数の著書を上梓しておられる法政大学の陣内秀信教授の友人であったことから，今回の随行講師である宮脇先生が陣内教授の紹介を得てこの講演が実現されたとのことである。

スライドを用いて，ヴェネツィアの歴史，ヴェネツィアの建築物の特徴，建築の基礎，橋梁，モーゼ計画などについて講演された。



マンクーソー教授と日本人の通訳

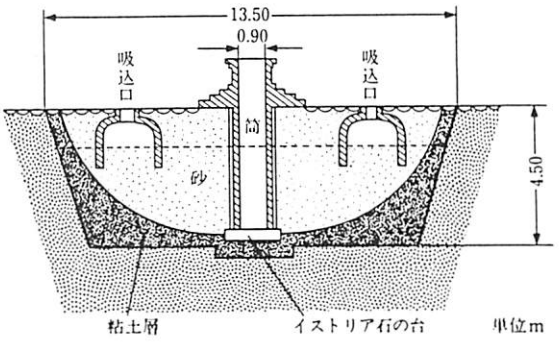
この中で私が特に興味を魅かれたのは，飲料水，汚水処理，基礎杭の問題，モーゼ計画であった。

（２）飲料水の確保

ヴェネツィアは干潟を埋めて造られた街であるため，当然，水が貯留される山や森，池はない。飲料水をどのように確保しているのか不思議である。

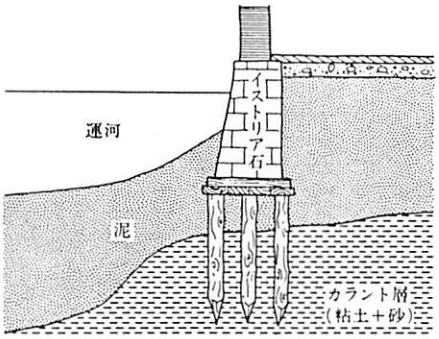
昔は庭や広場（カンポ）に貯水槽型の井戸（チステルノ）を造り，これに雨水を溜めて利用していたが，それでも，乾季には水量が足らないので本土から川の水を舟で運んできていたようである。現在は，本土から水道が引かれ，各家庭へ水が供給されているとのこと。

運河に架かる橋には，どこにも水道管が添加されている様子はなかったが，水道管は橋の中に埋め込まれているとのことであった。現在，井戸は使用されてはいないが，広場に残っており，雨水の吸込口，取出口が見られる。



井戸の構造

広場の井戸



建築の基礎の構造

（３）汚水処理

汚水は，昔はそのまま運河に放流されていたようであるが，現在は浄化槽が建物や道路の下に設置されるようになっているとのこと。

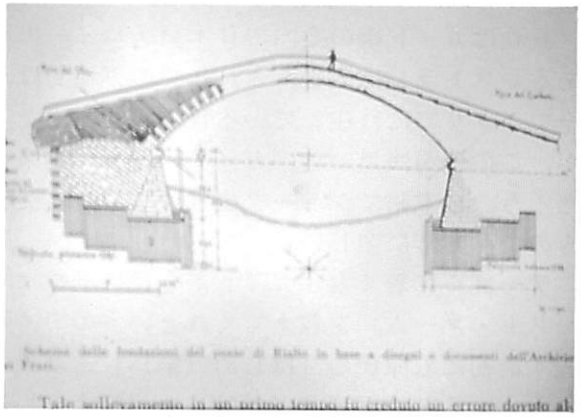
公共施設やホテル，レストランでは浄化槽の設置が義務づけられているが，一般の住宅では，まだ設置されていないところも多いようである。

（４）建物の基礎

ヴェネツィアは，海底から深度６ｍ位までが泥で，その下に粘土と砂からなるカラント層が形成されており，建物や橋梁の基礎は長さ６～７ｍの木杭を４０～５０㎝の間隔に密に打って，カラント層に支持させているそうである。また，建物は，高さを押さえると共に，水際の正面には開口部を沢山造り，できるだけ軽くしているようである。

しかしそれでも，圧密沈下の問題は生じるのではないのかと質問したが，専門外で良く分からない様子であった。

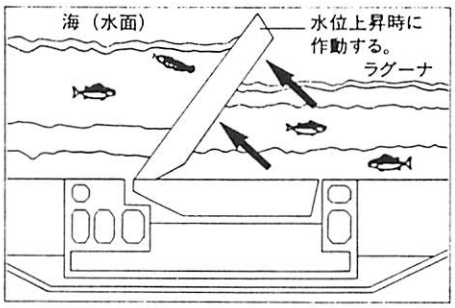
講演の後の市内見学の際，建築物を注意深く観察すると，問題になる程ではないが，不等沈下のため傾いているように思えた。また，大理石で敷き詰められたサン・マルコ教会の床は，不等沈下の影響でかなり波打っていた。



リアルト橋のスライド

（５）モーゼ計画

モーゼ(MOSE)計画とは，海底に可動堤防を建設し，潟の形態を変えることなく，毎年１０回程度発生している高潮災害を防ぐための計画であり，現在，実験的研究が行われているとのことであった。



動く堤防の構造

１９．ヴェネツィア市内見学

マンクーソー教授の講演の後，現地ガイド嬢の案内で旧刑務所跡，旧刑務所に入る溜め息橋，サン・マルコ広場，サン・マルコ寺院，ドゥーカレ宮殿，リアトル橋を見物する。

（１）サン・マルコ広場

世界中に名の知れたサン・マルコ広場(Piazza San Marco)は，さながら「大理石の客間」のようである。広場の周りをめぐる回廊には，有名なカフェや高級ブチックが軒を並べる。

今日は，９時頃が満潮であったのであろう。

サン・マルコ大寺院

水に浸かったサン・マルコ広場

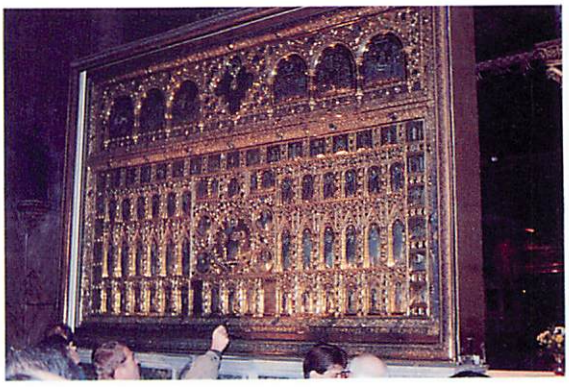
このため広場は，地中から海水がにじみ出て部分的に水没しており，深い所では水深が１５cm程度になっていた。水没個所には机のような歩行用の移動式桟橋が並べて設置されており，観光客はその上を歩いて移動していた。

広場には，１時間毎に鐘の音を響かせる高さ９９mの物見やぐらの鐘楼(カンパニーレ，Campanile)がそびえている。１９０２年に突然崩れ落ち，一石ずつ再建されたとのことである。崩壊の原因は，圧密による不同沈下に違いないと思った。見学の際は，足場が組まれ補修作業中であった。

（２）サン・マルコ寺院

サン・マルコ寺院(Bassilica)は，福音史家聖マルコの遺骨を納めるために１０６３年から１０７１年にかけて建てられたものである。

教会の内部の床は色とりどりのモザイク大理石，柱は珍しい大理石，壁には板状の大理石と全て大理石が施されている。上部の壁及びクーポラは，ガラスと金のマザイクで覆い尽くされている。



サン・マルコ大寺院のパラ・ドーロ

カンパニーレ（鐘塔）

祭壇の背後にある「パラ・ドーロ(Pala d'oro」は，金，銀，七宝でできており，オパール，ダイヤなど無数の宝石の組込まれ，実に素晴らしい。

２０．ヴェネツィアでの昼食

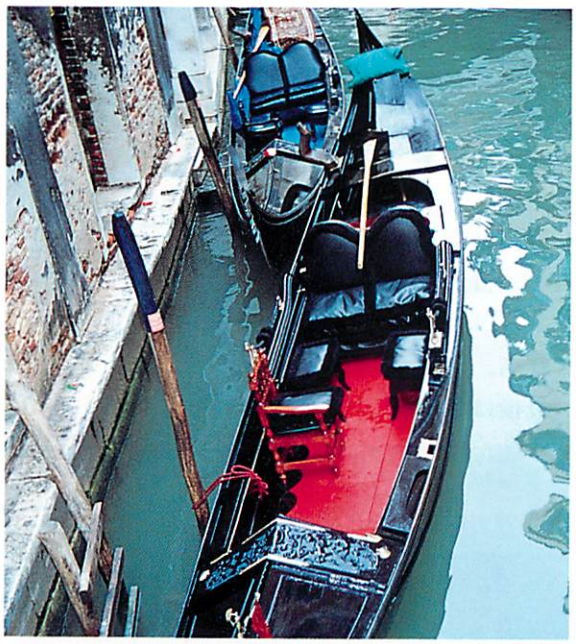
昼食はガイド嬢の案内で日本語メニューのあるレストランに入る。これまでのガイドは，全てイタリアに移住している日本人であったが，この色が浅黒い若いガイド嬢はインド系だろう。日本語でジョークを飛ばして良く笑うので，非常に楽しい。

テーブルに着くと，ガイドが全員に「ファースト・ネーム」を教えてくれというので，先ず最初に石原氏が「はじめ（肇）」と名乗った。すると，ガイドが「はじめ（初め）」の名前を教えろという。石原氏は「ファース

ト・ネームは，はじめ」と言ったので皆で大笑いになった。外国ならでは笑い話である。

この店のウエイターは，日本のテレホンカードを蒐集しているらしく，テレホンカードをくれないかと言うので，沢山持っていた中から，比較的きれいなのを３枚選んでさし上げると大袈裟な表情で有難がり，店の仲間にも見せて大喜びしていた。イタリア人は本当に陽気で楽しい。

この店の隣のテーブルでは日本の老夫婦が魚のスープを飲んでおり，とても美味しいと言うので私も魚のスープとヴェネツェア名物のイカ墨スパゲッティを注文する。スープを飲んだのはイタリアに来て初めてで，味噌味のようでもあり生き返る思いがした。また，イカ墨スパゲッティはイカの墨で炒めたもので，グロテスクではあるがとても味がまろやかで美味しい。他の人が注文したアサリのバター炒めも分けて貰って賞味したがなかなか良い味がする。ただ，ここのアサリもフィレンツェの場合と同様，十分に砂抜きされていないため口の中でジャリジャリする。



小運河に係留されたゴンドラ

２１．コモ湖畔のホテルへ

１５時ホテルダニエリのロビーに集合し，モーターボートに分乗してマルコ・ポーロ空港に行く。マルコ・ポーロ空港は本土側に有り，港を埋立てて造られた海上空港で，空港へ直接舟を乗り付けることができる。さすが水上都市。

１７時１０分発のＡＺ１７７便でミラーノ空港へ。そして，ミラーノからは高速道路Ａ８，Ａ９を北に走る。高速道路から見るミラーノの街には，近代的なビル，大きな商業看板が立ち並んでいる。過去の夢の世界から現実の世界に戻った思いがする。

２２．ヴィラ・デステホテルと夕食

コモ湖畔のヴィラ・デステ(VIRA D'ESTE)ホテルに着いたのは２１時３０分であった。

ヴィラ・デステホテルは，その名前が示すようにエステ家の別荘。中世に造られた建物で，１８７３年より５つ星の最高級ホテルになっている。絢爛豪華な建物とインテリが華やかな歴史を物語り，貫禄を感じる。建物の裏には広大な庭園が広がる。開業は３月から１１月半ばまでの期間で，冬季は休業するとのこと。アルプス山脈の裾野に位置するため，冬季は積雪も多いのであろう。

ホテルの周辺にはレストランがありそうにない。それで，ホテルの中のレストランで食べようと岡下氏と岡島氏の３人で入ってゆく。するとウエイターがとまどった様子をし，チーフを呼びにいった。食事をしている方は全員ジャケットにネクタイ姿であり，我々のようにジーンズ姿の者は誰一人としていない。何となく場違いな所に来てしまったような気がしていると，チーフが来て駄目だという。”人は見掛けでないぞ”と言いたかったが，よく考えてみると，高級レストランの場合，予約とジャケットにネクタイ姿が常識であり，両方の条件とも満たしていない我々が悪いと諦める。

仕方がないので，外にでることにした。ホテルの門の入り口に守衛がいたので，「近くにレストランは有るか」と訪ねると，５分位の所にあると教えてくれたのでホッとした。

レストランはすぐ見つかり，既にメンバーの中の６名程が来て食事をしていた。ここは二流のレストランであり，予約，服装の心配はない。

メニューはイタリア語で書かれている。とりあえずノンガスミネラルウオータとホワイ

トワインを注文し，３人でメニューを眺めても内容がほとんど理解できない。仕方がないかAntipasto(前菜)とPrimo Piatto(第一の皿)をとばして，Secondo Piatto(第二の皿)のPesci(魚料理)の欄とInsalata(サラダ)の欄に書かれている料理を上から順に１品ずつそれぞれ３品注文した。

魚料理は良かったのであるが，次のサラダにはビックリした。直径２０㎝，深さ５㎝くらいの大きな器一杯にトマトのきざまれたのが盛られているのである。１皿を３人で食べても食べ切れない量のものが３皿もでてきたのだ。

これを見て，「ローマはなぜ滅んだか」という本に書かれていたことが思い出された。ローマ時代の元老院議員など上流階層の饗宴では，沢山の量が入るように横たわって食事をし，それで満腹になったら，咽の奥に鳥の羽つきこんで胃の中のものを吐き，再び食べていた，のだそうだ。

イタリア人は１９００年も前からこのような食生活をしているから，胃袋が牛のように大きいのだろう。

２３．コモ市内見学（10月19日）

今日は旅行最後の日。ツァーの４名は名門ヴィラ・デステゴルフ場でゴルフを楽しみ，残り１３名はコモ市とミラーノ市を観光し，その後ミラーノのアーケード街でショッピングをする予定である。

観光組のガイド役は，８年前音楽の勉強のために渡欧してミラーノに住んでいるという鹿児島出身の是枝司氏。

アレキサンド・ボルトの墓

コモ湖は９月中頃からの長雨で湖水が３ｍ程上昇し，数日前は道路も冠水していたとのことであるが，この日はだいぶ水位が下がっていた。コモ市ではテラーニのデザインによる第二次世界大戦戦没者の慰霊塔，テラーニ作の建築物，電池の発明者アレキサンド・ボルトの墓等を見物する。

２４．ミラーノ市内見学

ミラーノの市街も他の都市と同様道路が狭い上，路上駐車が多い。このため，雨の日は特に混雑する。

ミラーノでは先ず最初にサンスイロ・スタジアムを見学する。収容人員８～８．５万人のサッカー競技用の巨大スタジアムである。

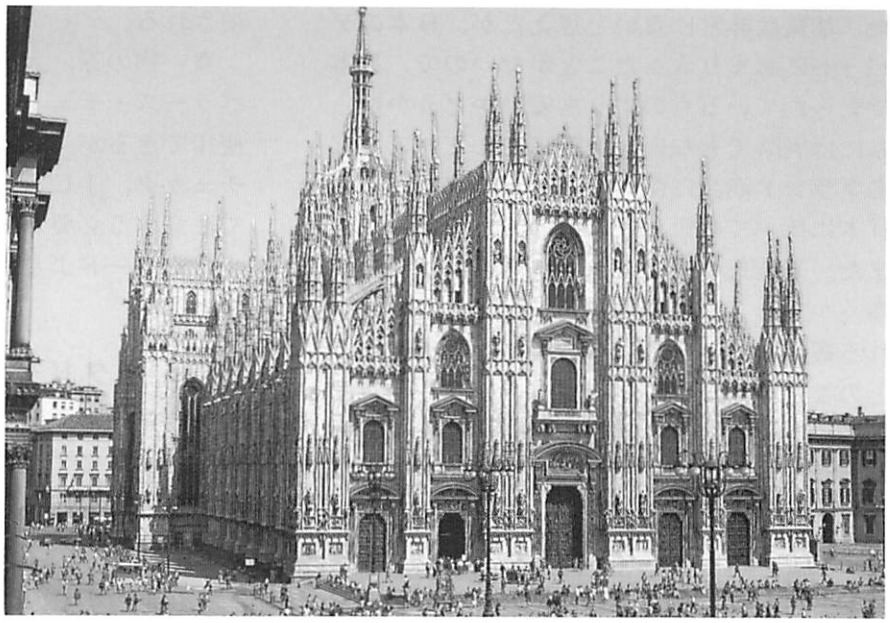
次に，ミラノのルネッサンス建築の代表作でゴシック様式の跡が残されたサンタ・マリア・デッレ・グラツィエ教会を外から見物する。この教会の左側には旧ドメニコ派修道院があり，その食堂跡には１４９５～９７年に描かれた，レオナルト・ダ・ビンチ作「最後の晩餐」の壁画がある。壁画は湿気のためかなり剥落しているため，修理の最中であった。

その後１４世紀末に建造の城壁に囲まれたスファルツァ城に入る。ここを抜けると４７万㎡の広大な緑のセンピオーネ公園があった。公園の奥の方（公園の入り口）には，ナポレオンがミラーノ入国のきっかけとなったマレンゴの戦いの勝利を記念して建てられた凱旋門アルコ・デッラ・パーチェ（平和の門）が見える。建築家ジオ・ポンティの設計としても有名。

最後は世界三大聖堂の一つとされるドゥオ

レオナルド・ダ・ビンチ作 最後の晩餐会

モ（大聖堂）を見学する。屋根には大小１３５本の尖った塔が天を突き刺すようにそびえ立つゴシック様式の建物である。１３８６年にヴィスコンティ家によって建設が始められ，５００年たった現在も建設が続行されているとのこと。セッカチな日本人にはとても信じ難い話である。内部は，聖書の教えを図に描いたステンドガラスで美しい。



ミラーノのドゥオーモ

２５．ドゥオーモ広場のジプシー

ドゥオモ前の広場の中央にはヴィットリオ・エマヌエーレ２世の像があり，観光客と鳩が群がっている。この広場には新聞を売る子供が沢山いる。いずれもジプシーだ。

ジプシー(Gypsy)を大辞林で調べると，「コーカサス人種に属する黒髪，黒眼の漂泊の民」と説明されているが，ガイドの説明では泥棒のイメージが強い。

私にも４人の子供が新聞を売り付けに近づいて来たが，大きな声で「ノー」といって追っ払った。目の前のジプシーに寄り付かれた日本の若い女性は，ショルダーバックでジプシーを叩いていた。ジプシーの手口は，数人の子供が片手に新聞紙を持って一人の観光客を取り囲み，片方の手で財布を抜き取るのだそうだ。フィレンツェではメンバーの一人の磯田さんが，ジプシーに会い追っ払ったが，全く気が付かない間にズボンの右の横ポケットから数千円抜かれ，その鮮かなテクニックに感動したと言っていた。

ドゥオーモ広場で遊ぶジプシー

また，鳩のエサを売る男の人もジプシーで，カメラの撮影を頼んだりするとそのままカメラを持ち逃げされるので要注意とのことであった。

２６．ミラーノでのショッピング

１５時ドゥオーモ広場で一旦解散する。各自ショッピングを楽しむためである。ドゥオーモ広場とスカーラ座（世界に名だたるオペラの殿堂）広場を結ぶ通りは，ヴィットリオ・エマヌエーレ二世アーケードと呼ばれる天井がガラス張りのアーケード街で，１８７７年に作られたもの。アーケード街にはサヴィーニやビッフィなどの有名レストランやブティック，本屋などがある。

私と岡島氏，秋野嬢の三人は，ガイドの是枝氏に案内してもらい，安い鞄の店，紳士皮革のブランドMORESCHIを扱った店に行く。鞄店では，ガイドブック等で大きなスーツケースが既に満杯状態になっていたので，土産物を入れる大きなボストンバッグ買う。

紳士皮革の店では，バッグ，靴，財布，革ジャンなどの革製品やネクタイが売られてい

た。革質は非常に良いと思えたが，日本のデパートにあまり入ったことがないので，日本で売られているものよりも安いかどうかは，私には判断できない。大阪に住んでいて，有名ブランド商品に関心の高い秋野嬢によると，日本に比べて格段に安いとのことであった。また，是枝氏の説明でも，皮革製品は税金が多くかかっていので，税金の払戻しが受けられる観光客にとっては他の商品より得になるとのことであった。イタリアの物価や所得は日本の６割であることから判断すると，日本の半額以下であろう。

イタリアに限らずヨーロッパでは，買い物をすると出国の際に税金の払戻が受けられる。ただし，そのためには，免税ショッピング会員の店で購入し，店員に「免税ショッピングチェック,Tax-free Shopping Cheque」を発行してもらう必要がある。免税ショッピングチェックを発行してもらうには，１個所の店で２万円程度以上の買い物をすることと，パスポートの番号を示さなければならない。空港の税関で，この免税ショッピングチェックと商品（ただし未使用に限る。イタリアでは商品の提示は求められなかった）を提示するとスタンプを押してくれる。それを，空港の免税店の中にある「免税現金払戻し」にもっていくと，購入金額の１割程度の税金が払い戻される。

ミラーノのアーケード

買い物の際，大きな店では日本円札，トラベラーズ・チェック，ＪＣＢカードいずれも使用できるが，店によってはトラベラーズ・チェック，ＪＣＢカードいずれも使えないので注意する必要がある。なお，イタリアではＪＣＢカードよりもＶＩＳＡカードが普及している。

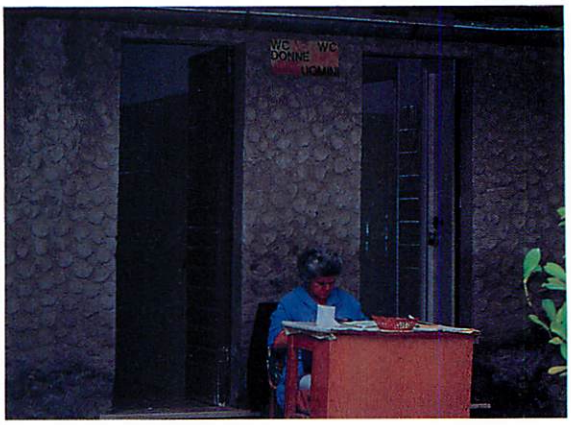
２７．イタリアのトイレ

旅行中，最も困るのがトイレ。日本の場合，観光地には必ず公衆トイレがあるが，イタリアでは非常に少ない。観光地で私が見たのは，ティヴォリのヴィラ・アドリアーナ，ヴィラ・デステ，ローマのナヴォーナの広場，アッシジにそれぞれ１個所あっただけである。このため，トイレになったらバール（喫茶店）を借りる以外ない。

公衆トイレの入り口には小銭入れが置かれている。有料なのか，チップとして支払うのか分からないが，皆，５００リラ（３５円）程度入れている。

ホテルのトイレは日本と同様の洋式便器が浴室に置かれている。また，便器のようで蓋のないビデがどこのホテルにも備え付けられている。これは，水を溜めて局部や尻を洗うのだそうだ。排出孔が小さいため，大便をすると詰まるので要注意。

レストランなどのトイレの便器は，洋式便器とよく似ているが，蓋と便座がない。男性の小便はよいが，女性の小便，あるいは大便はどのようにするのか良く分からない。和式トイレのようにかがんでするのであろうか。



ヴィラ・デステ（ティヴォリー）の公衆便所

ホテルの浴室のビデ

空港や高速道路のサービスエリアなどの小便用便器は，日本のものと同じであるが，取付られている高さが異常に高い。私のように背が低いと，背伸びしてなおかつペニスを持ち上げないと便器に届かない有様であった。これくらい高ければ，床に漏らす恐れは少ないであろう。

２８．ローマの橋

ローマの旧市内の西端を北から南にテヴェレ川が流れ，１５０ｍから７００ｍ位の間隔でマッツィーニ橋，サヴォイア・アオスタ橋，ヴィットリオ・エマヌエレ橋，サンタンジェロ橋，ウンベルト１世橋などの美しい橋梁がたくさん架けられている。

サンタンジェロ橋が５径間である以外は３径間の石造連続アーチ形式で，いずれの橋も周辺の景観に調和してとても美しい。

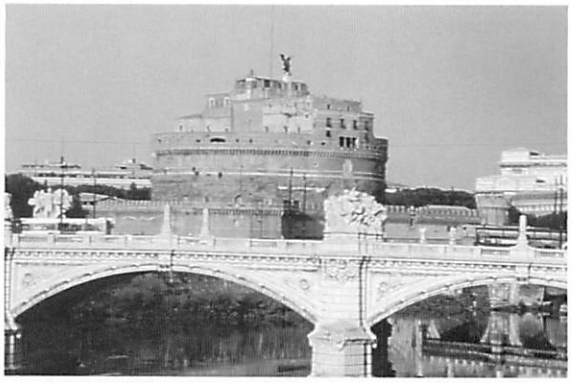
（１）サンタンジェロ橋

ローマの中でも最も美しいといわれているのが，サンタンジェロ城の正面に架かるサンタンジェロ橋(Ponte Sant' Angelo,聖天使の橋）だ。橋長は約１００ｍ。１３９年に建設されたもので，左右岸の側径間は２０世紀に架替えられているが，中央の３径間アーチ部は当時のまま残されている。高欄の上に並ぶ大理石造りの天使の像１０体は１７世紀のベルニーニの作品と言われている。

見学したときは，右岸側が補修中で足場が設けられ，上流側の歩道部のみが通行可能な状態であった。

サンタンジェロ橋（ローマ）

サンタンジェロ橋の側面（ローマ）



ヴィットリオ・エマヌエレ橋（ローマ）

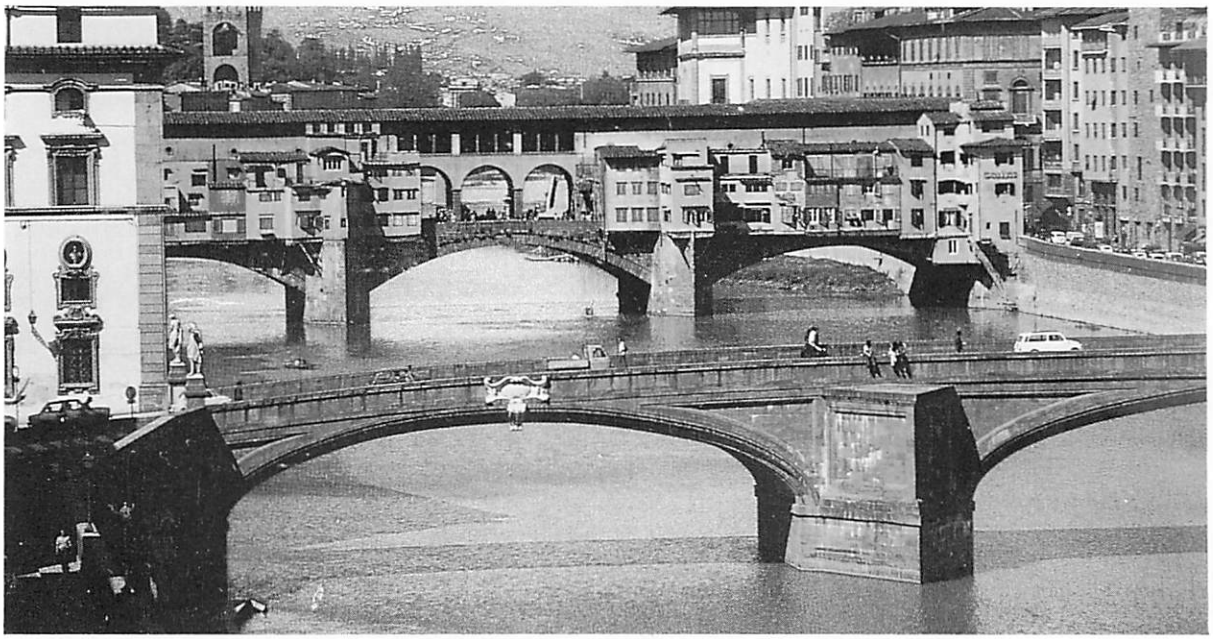
ヴィットリオ・エマヌエレ橋の親柱

（2）ヴィットリオ・エマヌエレ橋

サンタンジェロ橋から２００m下流のヴィットリオ・エマヌエレ２世通りには，ヴィットリオ・エマヌエレ橋(Ponte Vittorio Emanuele)が架かっている。この通りはサン・ピエトロ広場に通じ，観光バスなどの通る大きな通りである。高欄には大理石造りの大きな像が並び，４つの大きな親柱の上には天使が背中の羽を広げた彫刻が設置され，サンタンジェロ橋以上に美しい。

２９．フィレンツェの橋

フィレンツェの市内を北西から南東へ対角線を描くようなに流れるアルーノ川には１０橋の道路橋が架かっている。いずれも，石造あるいはコンクリートのアーチ橋だ。



ヴェッキオ橋とサンタ・トリニタ橋

（1）ヴェッキオ橋

ヴェッキオ橋(Ponte Vecchio)は世界的に有名な橋。この橋は，古代ローマ時代に造られたのが最初であるが，アルーノ川の洪水で２回流されている。現在のヴェッキオ橋は，ネリ・ディ・フィオラヴァンテの設計で１３４５年に造られた，橋長１５６ｍの石造３径間アーチ橋である。

橋の上には上流と下流側に２階建てのような家が建ち並び，橋の中央部が道路になっている。家の２階は，ヴァッサリの通路といい，ヴェッキオ宮殿からピッティ宮殿へ安全に移動するために造られたものだそうだ。通路の下には金細工などの小さな土産店が軒を連ねており，まるで２階建ての家のように見える。

ヴェッキオ橋の橋面

（2）サンタ・トリニタ橋

サンタ・トリニタ橋(Ponte S.Trinita)は，１５６７年から１５７０年にかけて造られた３径間の石造アーチ橋。ミケランジェロの指導のもとに，アンマンティによって設計されたといわれている。現在の橋は，戦災で壊されたことから１９５０年代に復元されたものである。

１６０８年に，四季をあらわす像が４隅の親柱の上に設置されている。左岸側の２つは男性で，右岸側の２つが女性像である。

各径間のアーチ中央部の高欄には，上下流側ともに不思議なシンボルが取付られている。

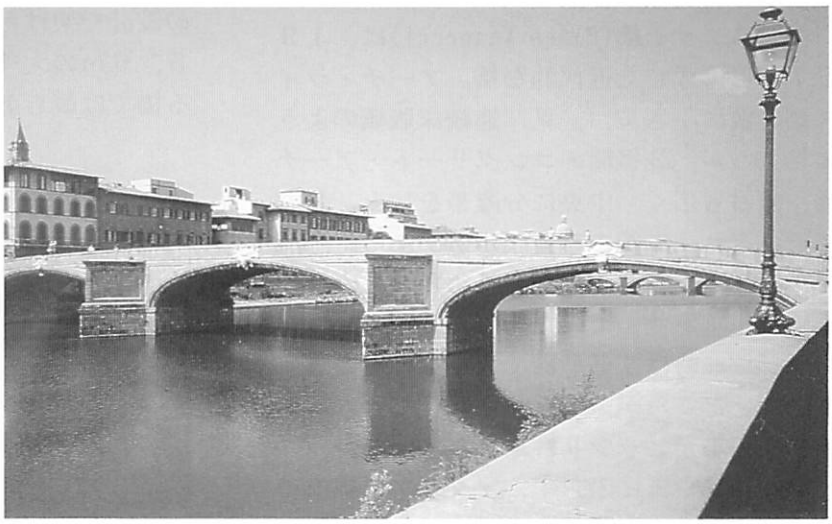
（3）その他の橋

最上流の橋が１９６９年に架設されたヴェッラッツァノ橋(Ponte da Verrazzano)。

その下流が，１９世紀に入って造られたサンタ・ニコロ橋(Ponte S.Niccolo)で，１径間のコンクリートアーチ橋。

アッレ・グラツィエ橋(Ponte alle Grazie)は，ヴェッキオ橋の直ぐ上流に架けられている，５径間のコンクリートアーチ橋。橋脚は石造。橋の側面につけられた曲線がとてもきれい。フィレンツェでは３番目に古く，１２３７年に造られたが，戦後に上部構造をコン

サンタ・トリニタ橋の親柱の像



サンタ・トリニタ橋

アッレ・グラツィエ橋

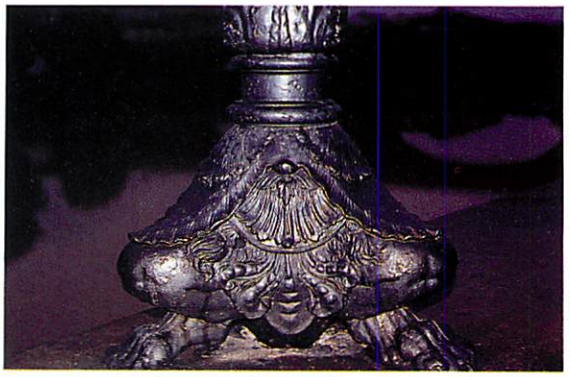
アルーノ川に張り出された道路

クリートで架替えたものと思われる。

アッラ・カライア橋(Ponte alla Carraia)は，２番目に古い橋。またの名をヌオーヴォ橋ともいう。最初は１２２０年に造られたが，２度の洪水と戦災で壊され，その都度架替えられている。５径間の石造アーチ橋である。側面に段差を付けることで地覆とアーチの線が強調されている。

ヴェスプッチ橋(Ponte Vespucci)は，１９５７年に落成した近代的な橋。アーチ・ライズが非常に小さく，一見，連続床版橋のように見えるが，３径間のコンクリート・アーチ橋。幅員も広く，中央に分離帯を挟み，左右にそれぞれ３車線の車道と歩道がある。上流のアッラ・カライア橋から眺めたとき，橋の上に乗用車が並んでいたので，フィレンツェもラッシュ時は交通渋滞で大変なのかと思っていた。ところが，翌朝見学に行くと，橋の上に乗用車がビッシリ駐車されていた。

フィレンツェに限らず，イタリアの都市では中世の街並みがそのまま残されている。このため市内には駐車場がほとんどなく，多くの車が路上駐車されている。



堤防の街燈の脚

ヴィットリア橋(Ponte d.Vittoria)は，１９２８年に架設された橋長１６０ｍの３径間コンクリート・アーチ橋。橋の側面には横断方向の曲線も入っており，非常に美しい。

３０．ヴェネツィアの運河に架かる橋

魚の形をしたヴェネツィアを逆Ｓ字形に大運河(カナル・グランデ)が貫通し，大運河にはスカルツィ橋，リアルト橋，アッカデミア橋の３つの橋が架かっている。また，１６０くらいあると言われている小運河には約４００の橋が架けられている。

このうち，世界的に有名なのがリアルト橋，観光の名所の一つになっているのがサン・マルコ広場の近くの小運河に架かっている溜め息橋(Ponte di Sospiri)だ。

（１）リアルト橋

リアルト橋(Ponte Rialto)は，１５９２年アントニオ・ダ・ポンテ(Antonio da Ponte)の設計で架けられた，橋長約５０ｍ，支間３５．６ｍの大理石造のアーチ橋。運河に架かる橋では最も美しい。

リアルト橋

有効幅員は約２６ｍあり，中央の７ｍ部分と上流と下流の３ｍがそれぞれ通路で，中央の通路と側道部との間にブチックや土産物屋が並んでいる。

リアルト橋はの架かっているリアルト地区は，カナル・グランデの中ほどにあって，市民の生活の中心になっている。このため，リアルト橋のある通りは，道の両側に野菜・果物・魚の市場，土産物屋などが立ち並び，混雑している。

（２）小運河に架かる橋

ヴェネツィアの小運河や小路（カッレ）は自然発生的にできたものが多く，迷路のように複雑に入り組んでいる。このため，橋も道と道をまっすぐ結べる場所は少なく，無理に曲げて架けられた橋(ポンテ・ストルト)，交差点の中央に架けられた橋など，様々な橋が多い。しかも，橋下をゴンドラやモーターボートなどの舟が行き来しなければならないため，全ての橋が太鼓橋になっている。

リアルト地区の市場

溜め息橋

小運河に架かる橋

小運河に架かる橋

小運河に架かる橋

小運河に架かる橋

３１．高速道路

（１）イタリアの高速道路

イタリアの高速道路には，アウトストラーダ(Autostada)とスペルストラーダ(Superstada)と呼ばれるものがある。アウトストラーダは有料でＡ１，Ａ２のように，スペルストラーダは無料でＳ１，Ｓ２のように略記されている。

イタリアの高速道路の歴史はドイツのアウトバーンに次いで古く，１９２５年にミラーノとラギーの間８４㎞が開通している。現在は，ローマからフィレンツェ，ボローニャを経由してミラーノに至るＡ１（太陽道路と呼ばれている）をはじめ，約６０００㎞の高速道路網が張り巡らされている。

（２）ローマからオルチの間（Ａ１）

高速道路は日本と同様片側２車線。中央分離帯側の路肩は５０㎝位であり，以外と狭い。

途中のサービス・エリアで，道路の上を横断して建てられたレスト・ハウスを見かけた。上り車線と下り車線の両方から利用できるし，用地も節約できるため経済的である。また，遠くから目立つというメリットもある。しかし，日本では道路法で許可にならないらしい。

オーバー・ブリッジはほとんどがＰＣ構造である。２個所で施工中のオーバー・ブリッジを見かける。これはいずれもプレートガーダー橋であった。主桁の上フランジにスタッド・ジベルが取り付けられているので合成桁であろう。なぜここだけに鋼構造が採用されているのか不思議に思えた。

切土個所の山留擁壁の表面は，モザイク調に平石を張ったものが多い。蛇籠積みの土留めもあったが，蛇籠の中には直方体のプレキャスト・コンクリートブロックが規則正しく詰められていた。

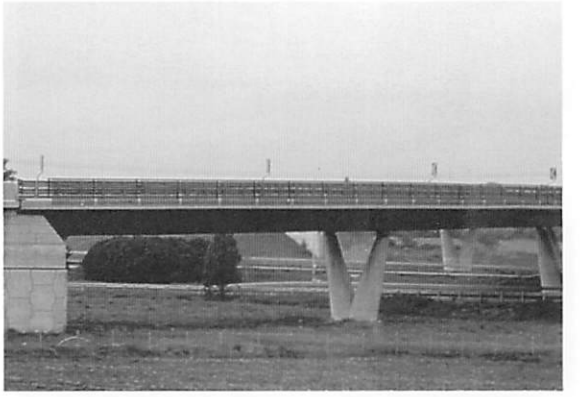
ＰＣ構造のオーバーブリッジ

（３）フィレンツェからボローニャ間（Ａ１）

ローマからフィレンツェまでの高速道路は地形のなだらかな高原地帯を走っているため，めぼしい構造物にはお目にかかれない。しかし，フィレンツェからボローニャにかけてのＡ１高速道路は，アペニンニ山脈を横断するため，トンネル，橋梁，ロックシェッドが次々に現われる。

フィレェンツェのインターチェンジの所で，橋台及びアプローチの盛土部にテール・アルメを採用した高架橋を見かける。橋脚はＶ字形をしており大変美しい。

山岳部の橋梁は，コンクリートの連続アーチ橋，変断面のプレートガーダー橋，逆ランガー橋が多く採用されているようである。また，壁高欄にはプレキャスト・コンクリート製が用いられている。



テール・アルメの橋台

トンネル

逆ランガー橋

植樹用ブロックと遮音壁（ボローニャ）

プレキャスト製高欄とアーチ鉄道高架

ポー川から北に多くなるメタルのオーバーブリッジ

（4）ボローニャからヴェネツィアの間

ボローニャからは平地になり道路構造物はオーバーブリッジ以外ほとんど見られなくなる。ボローニャから北へ５０㎞ほど走るとイタリアで最も大きいポー川を渡る。これまで雨が降り続いていたのか川が氾濫していた。

ポー川を渡る頃からオーバーブリッジの形式がコンクリート構造から鋼構造に変わる。イタリアの工業地帯が北部に集中しているためであろうか。

高速道路のサービスエリアのレストランで遅い昼食をとる。いろいろな料理が一列に並べられており，自分で好きなものを選んでレジで支払をするセルフサービス方式になっている。その中に，米と野菜で作られたサラダがあった。ポー平野では水稲栽培が行われているため，この地方では米を食べるのであろう。日本を離れて以来，米を見たのは初めてであったのでとても嬉しかった。ところが，まずくてとても食べられるものではない。日本の米は短粒米（ジャポニカ種）であるが，こちらのは長粒米（インディカ種）であり，アミロース（でんぷんの一種）が多いため粘り気がなくパラパラしている。このような米を日本にもってきてもなかなか売れないだろうと思えた。

ここのサービスエリアでは，日本と異なりビール，ワインもおいてある。イタリア人は，食事中に必ずワインかビールを飲むため。バスの運転手もワインを飲んでいた。

高速道路Ａ１３をパドヴァまで走り，そこからさらに高速道路Ａ４を北東に約２５㎞走るとメストレに入る。ここには，マルゲーラ港を埋立てた工場地帯が広がっている。多分，造船や橋梁の製作が行われているのであろう。メストレとヴェネツィアの間は長さ４㎞のリベルタ橋（Ponte della Liberta）で結ばれている。リベルタ橋は道路と鉄道併用橋で，片側を複線の鉄道が走り，反対側に４車線の道路がある。橋梁のタイプはスパン５０ｍ程度の上路式連続桁橋と思われる。

リベルタ橋を渡るとヴェネツィアの玄関サンタ・ルチア駅に着く。さらに長さ７０ｍのスカルツィ橋を渡ると道路の終点ローマ広場

ピルツ構造のＰＣ橋（パドヴァ）

ヴェネツィアに渡るリベルタ橋

である。

（５）ミラーノからコモの間

ミラーノとコモ間の高速道路Ａ９は１９２８年に作られたもので，制限速度は大型車が８０～１００km/h，普通車が１３０km/hとのこと。実際には普通車は１４０～１６０km/h，中には２００km/h近い猛スピードで走る車もあるが，鼠取りはほとんどやられていなようである。

路面舗装には部分的ではあるが透水性アスファルト舗装が試験的に採用されていた。雨が降っていたので普通舗装と透水性舗装の違いは一目瞭然だ。普通の舗装部では路面に水が溜り，車が走ると水しぶきが上がるが，透水性舗装では水しぶきが上がらず格段に走行性が優れている。耐久性に問題ないようであれば，今後は全て透水性舗装になるとのこと。

料金所のブースターは２０基余りある。これだけ多いと料金所での渋滞は少ないだろう。ブースターの内の１つはテレパス・システムになっている。これは，ブースターのセンサーが車両の運転席に取付た受信機を自動的に

一般の舗装と透水性舗装の試験施工

キャチし，料金が銀行の口座から支払われる仕組とのこと。ブースターで一時停止する必要がないので料金所での渋滞は解消される。将来的には全てのブースターでこのシステムが採用されるとのことであった。

３２．日本への帰国（10月20日）

１０時３０分ヴィラ・デステホテルをバスで出発し，ミラーノのマルペンサ国際空港へ。

出国も入国と同様，パスポートを提示するだけの簡単なもの。空港内の免税店で税金の払戻を受け取り，その金で土産物を買う。免税店では，リラ，カード，日本円の硬貨何でも使用できるので大変便利である。

成田行きＡＺ１７９０便は，１４時０５分発の予定であったが，１時間遅れの１５時０５分離陸する。

搭乗すると間もなく日本茶と寿司が出された。心にくいサービスである。この時ほど日本茶と寿司が美味しいと思ったことはない。

帰りは地球の回転方向と同じ方向に飛ぶので日が暮れるのが早い。一眠りした後，窓の外を眺めると一面雪に被われた景色が目に入

機内から眺めたシベリア

る。雪以外何もない。ここで飛行機が墜落すると，多分凍え死ぬだろうなどと空想する。手元の時計を見ると１１時５０分を指している。シベリアの上空なのだ。

日本時間の１０月２１日１１時，予定より１時間遅れて成田国際空港に到着する。

３３．あとがき

筆者は，１９９３年１０月１３日から２１日にかけての９日間，イタリアの各都市を訪問し，古代の遺跡，中世の建築，彫刻，美術，そして中世から現代にかけての橋，道路を見学してきた。

筆者のイタリアに関する知識は，中学時代に世界史と美術の授業で教わったものだけで，それも３０年近く経っており，ほとんど記憶に残っていなかった。それで，泥縄式にガイドブックやイタリアに関する書物を数冊読んで見た。富と貧しさ，先端技術と中世の遺物，過去と現在といった矛盾が共存する国，古代の遺跡や中世の美術，建築（ロマネスク，ゴシック，ルネサンス，バロック）が現存する国，スパゲッティとピザの本場であり有名ブランドのそろったファッションの国，そしてドロボーの多い国であるらしい。が，外国といえばハワイしか経験のない筆者には到底理解できるものではなかった。

しかし，わずか９日間の旅ではあったが，前述のキーワードを，そして２０００年の歴史の持つ重みを実感することができた。まさに「百聞は一見にしかず」の思いである。

イタリアは写真フィルムが高いと聞いていたので，日本から２０本用意して行った。しかし，実際に撮影したフィルムは３２本になっていた。目の前に次から次に現われる建築物，彫刻，道路，橋，人々の生活風景が美しく，珍しく，興奮と感動の連続であったのである。

イタリアは２０００年以上の歴史を持つ。しかしながら，イタリアが一つの国として統一されたのは，１８７０年と新しい。このため，一つの国とは思えないほど各都市の建築，芸術，文化が異なっている。このことも，シャッターチャンスを増やす原因になった。

筆者は英語が全くと言って良いくらい話せない。当然，イタリア語も駄目である。このため，旅行中数々の失敗を繰り返した。この紀行文を上梓しようとしたとき，最も楽しく，そして鮮明に思い出されたのが失敗のことであった。失敗だけは，実際に旅行しないと経験することができない。旅の本当の楽しさは，この失敗にあるように思われる。

今回の旅行で私の脳裏に焼き付いたイタリアの街の風景や感動が，いつまでも薄れ去ることがないようにとの思いと，できるだけ多くの方に素晴らしいイタリアを紹介したいという気持でこの紀行文をまとめたものである。この拙文がイタリアを知る上で少しでも役に立てば幸である。

紀行文を脱稿した現在の気持は，「もう一度イタリアを訪れたい」である。どうやら，私もすっかりイタリア病に感染してしまったようだ。

参考文献

（１）陣内秀信：ヴェネツィアー水上都市ー，講談社現代新書，１９９２年１２月

（２）坂本鉄男：イタリア歴史の旅，朝日新聞社，１９９２年１２月

（３）三輪福松：イタリア美術・人・風土，朝日新聞社，１９９１年１１月

（４）弓削　達：ローマはなぜ滅んだか，講談社現代新書，１９９２年１２月

（５）堀越孝一，三浦一郎：世界の歴史ー中世ヨーロッパー，１９９１年８月

（６）坂崎乙郎，野村太郎：西洋の美術，教養文庫，１９９０年５月

（７）芸術新潮：特集ヴァチカン王国，新潮社，１９９３年１０月

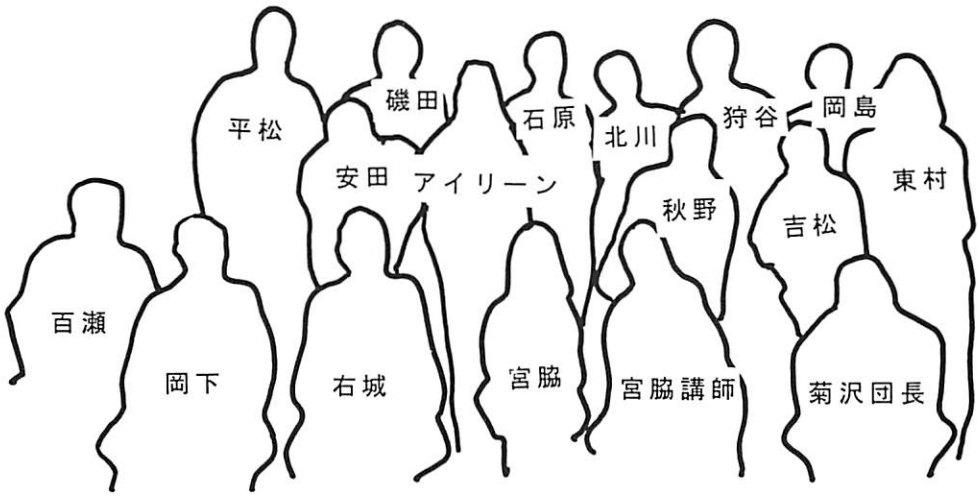
（８）イタリア：ブルーガイド・ワールド，実業之日本社，１９９３年３月

（９）イタリア：海外フリータイムガイド，昭文社，１９９３年４月

(10) イタリア：ミシュラン・グリーンガイド，NIHON MIVHELIN TIRE CO.,LTD. 実業之日本社，１９９１年９月

(11) 陣内秀信：水上都市ヴェネツィアの生成と輝き，FRONT，１９９３年３月

(12) MAGGI ROBELTO：水都市ヴェネツィアの保全開発２，FRONT,１９９３年３月



ツァー参加者（ヴァチカン市国のサン・ピエトロ広場にて）

著者略歴

右城　猛（うしろ・たけし）

昭和２５年５月２２日生

高知県長岡郡本山町出身

昭和４５年３月　高知工業高等学校土木科卒

昭和５２年３月　徳島大学工業短期大学部土木工学科卒

現　在　㈱第一コンサルタンツ常務取締役

高知県技術交流会会長、土質工学会四国支部幹事

高知県土質工学研究会幹事、高知県橋梁会副会長

高知県技術士会書記、高知県建設高等職業訓練校講師

技術士（建設部門、土質及び基礎）

著　書　中小橋梁の計画　㈱第一コンサルタンツ　１９８６年

擁壁の設計法と計算例　理工図書㈱　１９８９年

住　所　〒７８１－５１高知市介良乙１０００－３７

イタリア紀行

１９９年１１月３０日発行

著　者　右城　猛

発行所　高知県技術交流会

〒７８０高知市高須新町３－１－５

第一コンサルタンツ内

℡0888(84)1330

印刷所　川北印刷株式会社